# 浅草公園

## ——或シナリオ——

芥川龍之介

1

浅草の仁王門の中に吊った、火のともらない大提灯。提灯は次第に上へあがり、雑沓した仲店を見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失せない。門の前に飛びかう無数の鳩。

2

雷門から縦に見た仲店。正面にはるかに仁王門が見える。樹木は皆枯れ木ばかり。

仲店の片側（かたがわ）。外套（がいとう）を着た男が一人（ひとり）、十二三歳の少年と一しょにぶらぶら仲店を歩いている。少年は父親の手を離れ、時々玩具屋（おもちゃや）の前に立ち止まったりする。父親は勿論こう云う少年を時々叱ったりしないことはない。が、稀（まれ）には彼自身も少年のいることを忘れたように帽子屋（ぼうしや）の飾り窓などを眺めている。

こう云う親子の上半身（じょうはんしん）。父親はいかにも田舎者（いなかもの）らしい、無精髭（ぶしょうひげ）を伸ばした男。少年は可愛（かわい）いと云うよりもむしろ可憐な顔をしている。彼等の後（うし）ろには雑沓した仲店。彼等はこちらへ歩いて来る。

## 5

斜めに見たある玩具屋（おもちゃや）の店。少年はこの店の前に佇（たたず）んだまま、綱を上（のぼ）ったり下（お）りたりする玩具の猿を眺めている。玩具屋の店の中には誰も見えない。少年

の姿は膝の上まで。

6

綱を上ったり下りたりしている猿。猿は燕尾服の尾を垂れた上、シルク・ハットを仰向けにかぶっている。この綱や猿の後ろは深い暗のあるばかり。

7

この玩具屋のある仲店の片側。猿を見ていた少年は

急に父親のいないことに気がつき、きょろきょろあたりを見まわしはじめる。それから向うに何か見つけ、その方へ一散（いっさん）に走って行（ゆ）く。

8

父親らしい男の後ろ姿。ただしこれも膝の上まで。少年はこの男に追いすがり、しっかりと外套の袖を捉（とら）える。驚いてふり返った男の顔は生憎（あいにく）田舎者（いなかもの）らしい父親ではない。綺麗（きれい）に口髭（くちひげ）の手入れをした、都会人らしい紳士である。少年の顔に往来する失望や当惑に満ち

た表情。紳士は少年を残したまま、さっさと向うへ行ってしまう。少年は遠い雷門（かみなりもん）を後ろにぼんやり一人佇んでいる。

9

もう一度父親らしい後ろ姿。ただし今度は上半身（じょうはんしん）。

少年はこの男に追いついて恐る恐るその顔を見上げる。

彼等の向うには仁王門（におうもん）。

10

この男の前を向いた顔。彼は、マスクに口を蔽（おお）った、人間よりも、動物に近い顔をしている。何か悪意の感ぜられる微笑（びしょう）。

## 11

仲店の片側。少年はこの男を見送ったまま、途方（とほう）に暮れたように佇んでいる。父親の姿はどちらを眺めても、生憎（あいにく）目にははいらないらしい。少年はちょっと考えた後（のち）、当（あて）どもなしに歩きはじめる。いずれも洋装を

した少女が二人、彼をふり返ったのも知らないように。

目金屋の店の飾り窓。近眼鏡、遠眼鏡、双眼鏡、廓大鏡、顕微鏡、塵除け目金などの並んだ中に西洋人の人形の首が一つ、目金をかけて頬笑んでいる。その窓の前に佇んだ少年の後姿。ただし斜めに後ろから見た上半身。人形の首はおのずから人間の首に変ってしまう。のみならずこう少年に話しかける。――

13

「目金を買っておかけなさい。お父さんを見付るには目金をかけるのに限りますからね。」

「僕の目は病気ではないよ。」

14

斜めに見た造花屋の飾り窓。造花は皆竹籠だの、瀬戸物の鉢だのの中に開いている。中でも一番大きいの

は左にある鬼百合（おにゆり）の花。飾り窓の板硝子（ガラス）は少年の上半身を映しはじめる。何か幽霊のようにぼんやりと。

15

飾り窓の板硝子越しに造花を隔てた少年の上半身。少年は板硝子に手を当てている。そのうちに息の当るせいか、顔だけぼんやりと曇ってしまう。

16

飾り窓の中の鬼百合の花。ただし後ろは暗である。
鬼百合の花の下に垂れている蕾（つぼみ）もいつか次第に開き
はじめる。

17

「わたしの美しさを御覧なさい。」
「だってお前は造花じゃないか？」

18

角から見た煙草屋の飾り窓。巻煙草の缶、葉巻の箱、パイプなどの並んだ中に斜めに札が一枚懸っている。この札に書いてあるのは、——「煙草の煙は天国の門です。」徐ろにパイプから立ち昇る煙。

19

煙の満ち充ちた飾り窓の正面。少年はこの右に佇んでいる。ただしこれも膝の上まで。煙の中にはぼんやりと城が三つ浮かびはじめる。城は Three Castles の商標を立体にしたものに近い。

20

それ等の城の一つ。この城の門には兵卒が一人銃を持って佇んでいる。そのまた鉄格子（てつごうし）の門の向うには棕櫚（しゅろ）が何本もそよいでいる。

21

この城の門の上。そこには横にいつの間（ま）にかこう云う文句が浮かび始める。——

「この門に入るものは英雄となるべし。」

22

こちらへ歩いて来る少年の姿。前の煙草屋の飾り窓は斜めに少年の後ろに立っている。少年はちょっとふり返って見た後、さっさとまた歩いて行ってしまう。

23

吊り鐘だけ見える鐘楼の内部。撞木は誰かの手に綱

を引かれ、徐ろに鐘を鳴らしはじめる。一度、二度、三度、——鐘楼の外は松の木ばかり。

## 24

斜めに見た射撃屋の店。的は後ろに巻煙草の箱を積み、前に博多人形を並べている。手前に並んだ空気銃の一列。人形の一つはドレッスをつけ、扇を持った西洋人の女である。少年は怯ず怯ずこの店にはいり、空気銃を一つとり上げて全然無分別に的を狙う。射撃屋の店には誰もいない。少年の姿は膝の上まで。

25

西洋人の女の人形。人形は静かに扇をひろげ、すっかり顔を隠してしまう。それからこの人形に中（あた）るコルクの弾丸（たま）。人形は勿論仰向（あおむ）けに倒れる。人形の後ろにも暗のあるばかり。

26

前の射撃屋の店。少年はまた空気銃をとり上げ、今

度は熱心に的を狙う。三発、四発、五発、――しかし的は一つも落ちない。少年は渋ぶ渋ぶ銀貨を出し、店の外へ行ってしまう。



始めはただ薄暗い中に四角いものの見えるばかり。その中にこの四角いものは突然電燈をともしたと見え、横にこう云う字を浮かび上らせる。――上に「公園六区」下に「夜警詰所」。上のは黒い中に白、下のは黒い中に赤である。

劇場の裏の上部。火のともった窓が一つ見える。まっ直(すぐ)に雨樋(あまどい)をおろした壁にはいろいろのポスタアの剥(は)がれた痕(あと)。



この劇場の裏の下部(かぶ)。少年はそこに佇(たたず)んだまま、しばらくはどちらへも行(ゆ)こうとしない。それから高い

窓を見上げる。が、窓には誰も見えない。ただ逞(たくま)しいブルテリアが一匹、少年の足もとを通って行く。少年の匂(におい)を嗅(か)いで見ながら。

## 30

同じ劇場の裏の上部。火のともった窓には踊り子が一人現れ、冷淡に目の下の往来を眺める。この姿は勿論(もちろん)逆光線のために顔などははっきりとわからない。が、いつか少年に似た、可憐(かれん)な顔を現してしまう。踊り子は静かに窓をあけ、小さい花束(はなたば)を下に投げる。

31

往来に立った少年の足もと。小さい花束が一つ落ちて来る。少年の手はこれを拾う。花束は往来を離れるが早いか、いつか茨(いばら)の束に変っている。

32

黒い一枚の掲示板(けいじばん)。掲示板は「北の風、晴」と云う字をチョオクに現している。が、それはぼんやりとな

り、「南の風強かるべし。雨模様」と云う字に変ってしまう。



斜に見た標札屋の露店、天幕の下に並んだ見本は徳川家康、　二宮尊徳、　渡辺崋山、　近藤勇、近松門左衛門などの名を並べている。こう云う名前もいつの間にか有り来りの名前に変ってしまう。のみならずそれ等の標札の向うにかすかに浮んで来る南瓜畠……

池の向うに並んだ何軒かの映画館。池には勿論電燈の影が幾つともなしに映っている。池の左に立った少年の上半身（じょうはんしん）。少年の帽は咄嗟（とっさ）の間（あいだ）に風のために池へ飛んでしまう。少年はいろいろあせった後（のち）、こちらを向いて歩きはじめる。ほとんど絶望に近い表情。

カッフェの飾り窓。砂糖の塔、生菓子(なまがし)、麦藁(むぎわら)のパイプを入れた曹達水(ソオダすい)のコップなどの向うに人かげが幾つも動いている。少年はこの飾り窓の前へ通りかかり、飾り窓の左に足を止めてしまう。少年の姿は膝の上まで。

このカッフェの外部。夫婦らしい中年の男女(なんにょ)が二人硝子(ガラス)戸の中へはいって行く。女はマントルを着た子供を抱(だ)いている。そのうちにカッフェはおのずからまわ

り、コック部屋の裏を現わしてしまう。コック部屋の裏には煙突（えんとつ）が一本。そこにはまた労働者が二人せっせとシャベルを動かしている。カンテラを一つともしたまま。……

テエブルの前の子供椅子（いす）の上に上半身を見せた前の子供。子供はにこにこ笑いながら、首を振ったり手を挙げたりしている。子供の後ろには何も見えない。そこへいつか薔薇（ばら）の花が一つずつ静かに落ちはじめる。

斜めに見える自動計算器。計算器の前には手が二つしきりなしに動いている。勿論女の手に違いない。それから絶えず開かれる抽斗（ひきだし）。抽斗の中は銭（ぜに）ばかりである。



前のカッフェの飾り窓。少年の姿も変りはない。し

ばらくの後(のち)、少年は徐(おもむ)ろに振り返り、足早(あしばや)にこちらへ歩いて来る。が、顔ばかりになった時、ちょっと立ちどまって何かを見る。多少驚きに近い表情。



人だかりのまん中に立った糶(せ)り商人(あきゅうど)。彼は呉服(ごふく)ものをひろげた中に立ち、一本の帯をふりながら、熱心に人だかりに呼びかけている。

彼の手に持った一本の帯。帯は前後左右に振られながら、片はしを二三尺現している。帯の模様は廓大した雪片。雪片は次第にまわりながら、くるくる帯の外へも落ちはじめる。



メリヤス屋の露店。シャツやズボン下を吊った下に婆さんが一人行火に当っている。婆さんの前にもメリヤス類。毛糸の編みものも交っていないことはない。

行火の裾(すそ)には黒猫が一匹時々前足を嘗(な)めている。

43

行火の裾に坐っている黒猫。左に少年の下半身(かはんしん)も見える。黒猫も始めは変りはない。しかしいつか頭の上に流蘇(ふさ)の長いトルコ帽をかぶっている。

44

「坊ちゃん、スウェエタアを一つお買いなさい。」

「僕は帽子さえ買えないんだよ。」

45

メリヤス屋の露店を後ろにした、疲れたらしい少年の上半身（じょうはんしん）。少年は涙を流しはじめる。が、やっと気をとり直し、高い空を見上げながら、もう一度こちらへ歩きはじめる。

46

かすかに星のかがやいた夕空。そこへ大きい顔が一つおのずからぼんやりと浮かんで来る。顔は少年の父親らしい。愛情はこもっているものの、何か無限にもの悲しい表情。しかしこの顔もしばらくの後、霧のようにどこかへ消えてしまう。

47

縦に見た往来。少年はこちらへ後ろを見せたまま、この往来を歩いて行く。往来は余り人通りはない。少年の後ろから歩いて行く男。この男はちょっと振り返

り、マスクをかけた顔を見せる。少年は一度も後ろを
見ない。

48

斜めに見た格子戸（こうしど）造りの家の外部。家の前には
人力車（じんりきしゃ）が三台後ろ向きに止まっている。人通りはやは
り沢山ない。角隠（つのかく）しをつけた花嫁（はなよめ）が一人、何人かの
人々と一しょに格子戸を出、静かに前の人力車に乗る。
人力車は三台とも人を乗せると、花嫁を先に走って行
く。そのあとから少年の後ろ姿。格子戸の家の前に

立った人々は勿論少年に目もやらない。



「ＸＹＺ会社特製品、迷い子、文芸的映画」と書いた長方形の板。これもこの板を前後にしたサンドウィッチ・マンに変ってしまう。サンドウィッチ・マンは年をとっているものの、どこか仲店(なかみせ)を歩いていた、都会人らしい紳士に似ている。後ろは前よりも人通りは多い、いろいろの店の並んだ往来。少年はそこを通りかかり、サンドウィッチ・マンの配(くば)っている広告を一枚

貰って行く。

50

縦に見た前の往来。松葉杖をついた癈兵(はいへい)が一人ゆっくりと向うへ歩いて行(ゆ)く。癈兵はいつか駝鳥(だちょう)に変っている。が、しばらく歩いて行くうちにまた癈兵になってしまう。横町(よこちょう)の角(かど)にはポストが一つ。

51

「急げ。急げ。いつ何時（なんどき）死ぬかも知れない。」



往来の角（かど）に立っているポスト。ポストはいつか透明になり、無数の手紙の折り重なった円筒の内部を現して見せる。が、見る見る前のようにただのポストに変ってしまう。ポストの後ろには暗のあるばかり。

斜めに見た芸者屋町（げいしゃやまち）。お座敷へ出る芸者が二人（ふたり）ある御神燈（ごしんとう）のともった格子戸（こうしど）を出、静かにこちらへ歩いて来る。どちらも何（なん）の表情も見せない。二人の芸者の通りすぎた後（のち）、向うへ歩いて行（ゆ）く少年の姿。少年はちょっとふり返って見る。前よりもさらに寂しい表情。少年はだんだん小さくなって行く。そこへ向うに立っていた、背（せ）の低い声色遣（こわいろつか）いが一人（ひとり）やはりこちらへ歩いて来る。彼の目（ま）のあたりへ近づいたのを見ると、どこか少年に似ていないことはない。

大きい針金（はりがね）の環（わ）のまわりにぐるりと何本もぶら下げたかもじ。かもじの中には「すき毛入り前髪（まえがみ）立て」と書いた札（ふだ）も下っている。これ等のかもじはいつの間（ま）にか理髪店の棒に変ってしまう。棒の後ろにも暗のあるばかり。



理髪店の外部。大きい窓硝子（ガラス）の向うには男女（なんにょ）が何人も動いている。少年はそこへ通りかかり、ちょっと内

部を覗（のぞ）いて見る。



頭を刈（か）っている男の横顔。これもしばらくたった後、大きい針金の環（わ）にぶら下げた何本かのかもじに変ってしまう。かもじの中に下った札（ふだ）が一枚。札には今度は「入れ毛」と書いてある。

セセッション風に出来上った病院。少年はこちらから歩み寄り、石の階段を登って行く、しかし戸の中へはいったと思うと、すぐにまた階段を下って来る。少年の左へ行った後、病院は静かにこちらへ近づき、とうとう玄関だけになってしまう。その硝子戸を押しあけて外へ出て来る看護婦が一人。看護婦は玄関に佇んだまま、何か遠いものを眺めている。



膝の上に組んだ看護婦の両手。前になった左の手に

は婚約の指環が一つはまっている。が、指環はおのずから急に下へ落ちてしまう。

わずかに空を残したコンクリイトの塀。これもおのずから透明になり、鉄格子の中に群った何匹かの猿を現して見せる。それからまた塀全体は操り人形の舞台に変ってしまう。舞台はとにかく西洋じみた室内。そこに西洋人の人形が一つ怯ず怯ずあたりを窺っている。覆面をかけているのを見ると、この室へ忍びこ

んだ盗人（ぬすびと）らしい。室の隅には金庫が一つ。

60

金庫をこじあけている西洋人の人形。ただしこの人形の手足についた、細い糸も何本かははっきりと見える。……

61

斜めに見た前のコンクリイトの塀。塀はもう何も現

していない。そこを通りすぎる少年の影。そのあとから今度は背むしの影。

62

前から斜めに見おろした往来。往来の上には落ち葉が一枚風に吹かれてまわっている。そこへまた舞い下(さが)って来る前よりも小さい落葉が一枚。最後に雑誌の広告らしい紙も一枚翻(ひるがえ)って来る。紙は生憎(あいにく)引き裂(さ)かれているらしい。が、はっきりと見えるのは「生活、正月号」と云う初号活字である。

大きい常磐木(ときわぎ)の下にあるベンチ。木々の向うに見えているのは前の池の一部らしい。少年はそこへ歩み寄り、がっかりしたように腰をかける。それから涙を拭(ぬぐ)いはじめる。すると前の背むしが一人やはりベンチへ来て腰をかける。時々風に揺(ゆ)れる後(うし)ろの常磐木。少年はふと背むしを見つめる。が、背むしはふり返りもしない。のみならず懐(ふところ)から焼き芋を出し、がつがつしているように食いはじめる。

64

焼き芋（いも）を食っている背むしの顔。

65

前の常磐木（ときわぎ）のかげにあるベンチ。背むしはやはり焼き芋を食っている。少年はやっと立ち上り、頭を垂れてどこかへ歩いて行（ゆ）く。

斜めに上から見おろしたベンチ。板を透かしたベンチの上には蟇口（がまぐち）が一つ残っている。すると誰かの手が一つそっとその蟇口をとり上げてしまう。



前の常磐木のかげにあるベンチ。ただし今度は斜めになっている。ベンチの上には背むしが一人蟇口の中を検（しら）べている。そのうちにいつか背むしの左右に背む

しが何人も現れはじめ、とうとうしまいにはベンチの上は背むしばかりになってしまう。しかも彼等は同じようにそれぞれ皆熱心に蟇口の中を検べている。互に何か話し合いながら。



写真屋の飾り窓。男女(なんにょ)の写真が何枚もそれぞれ額縁(がくぶち)にはいって懸(かか)っている。が、それ等の男女の顔もいつか老人に変ってしまう。しかしその中にたった一枚、フロック・コオトに勲章をつけた、顋髭(あごひげ)のある老人の

半身だけは変らない。ただその顔はいつの間(ま)にか前の背むしの顔になっている。

69

横から見た観音堂(かんのんどう)。少年はその下を歩いて行(ゆ)く。観音堂の上には三日月(みかづき)が一つ。

70

観音堂の正面の一部。ただし扉(とびら)はしまっている。

その前に礼拝（らいはい）している何人かの人々。少年はそこへ歩みより、こちらへ後ろを見せたまま、ちょっと観音堂を仰いで見る。それから突然こちらを向き、さっさと斜めに歩いて行ってしまう。



斜めに上から見おろした、大きい長方形の手水鉢（ちょうずばち）。柄杓（ひしゃく）が何本も浮かんだ水には火（ほ）かげもちらちら映っている。そこへまた映って来る、憔悴（しょうすい）し切った少年の顔。

大きい石燈籠（いしどうろう）の下部。少年はそこに腰をおろし、両手に顔を隠して泣きはじめる。

72

前の石燈籠の下部の後ろ。男が一人佇（たたず）んだまま、何かに耳を傾けている。

73

74

この男の上半身。もっとも顔だけはこちらを向いていない。が、静かに振り返ったのを見ると、マスクをかけた前の男である。のみならずその顔もしばらくの後（のち）、少年の父親に変ってしまう。

前の石燈籠の上部。石燈籠は柱を残したまま、おのずから炎（ほのお）になって燃え上ってしまう。炎の下火（したび）になった後（のち）、そこに開き始める菊の花が一輪。菊の花は

石燈籠の笠よりも大きい。

76

前の石燈籠の下部。少年は前と変りはない。そこへ帽を目深（まぶか）にかぶった巡査（じゅんさ）が一人歩みより、少年の肩へ手をかける。少年は驚いて立ち上り、何か巡査と話をする。それから巡査に手を引かれたまま、静かに向うへ歩いて行（ゆ）く。

77

前の石燈籠の下部の後ろ。今度はもう誰もいない。

78

前の仁王門（におうもん）の大提灯（おおぢょうちん）。大提灯は次第に上へあがり、前のように仲店（なかみせ）を見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失（う）せない。

（昭和二年三月十四日）

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房
　　1987（昭和62）年3月24日第1刷発行
　　1993（平成5）年2月25日第6刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1998年4月20日公開
2004年3月7日修正